

「横地分類 (改訂大島分類)」

「移動機能」、「知能」、「特記事項」の3項目で分類し、以下のように表記する。

例：A1-C, B2, D2-U, B5-B, C4-D

〈知能レベル〉						
E6	E5	E4	E3	E2	E1	簡単な計算可
D6	D5	D4	D3	D2	D1	簡単な文字・数字の理解可
C6	C5	C4	C3	C2	C1	簡単な色・数の理解可
B6	B5	B4	B3	B2	B1	簡単な言語理解可
A6	A5	A4	A3	A2	A1	言語理解不可
戸外歩行可						〈特記事項〉 C: 有意な眼瞼運動なし B: 盲 D: 難聴 U: 両上肢機能全廃
室内歩行可						
室内移動可						
座位保持可						
寝返り可						〈移動機能レベル〉
寝返り不可						

を知らねばなりません。そして、達成感があったのか、なかったのかの表出を正しく受け取らねばなりません。こうした日常生活を個々に設定し、実践するのが私たち施設職員の業務です。思い通りの結果が得られたならば、その人の質の高い生活に寄与したことになります。そうなれば、実は、私たち職員の生活の質も高まり、理想的な好循環が得られます。そうなるように努めます。



こだまの 日常生活紹介 片所 加代子

こだまの多くの利用者は横地分類のA1に入ります。20名全員が気管切開をしていて、その内12名が人工呼吸器を装着しているため、終日ベッドで過ごすことが多いという現状です。しかし、少しでもベッドから離れる時間を持つことを目標にして利用者に関わっています。

また、睡眠覚醒のリズムが乱れやすい方、筋緊張が強く入ってしまう方、体調を崩しやすい方等、日常生活を提供するにあたって困難な状況になることもありますが、利用者の体調を考慮し、一人一人にあった日常生活を毎日午後の時間を使って提供しています。

日常生活の多くは感覚に働きかける内容のものです。絵本の読み聞かせ・音楽に合わせながらのマッサージ・抱っこ・外気浴等を中心に行っています。

人工呼吸器を装着している人たちの移動は危険が伴うため、多くの職員の手と時間が

必要になります。そのため、毎日全員がベッドから離れることは出来ませんが、職員間で協力して車椅子に乗る時間を作っています。体調を考慮しながら、車椅子に乗って他のグループにいる利用者や職員と関わる時間を設けたり、エレベーターホールにある「ベルシンフォニー(ベルの自動演奏機)」を聴きに行ったり、楽器の音を聴いたりしています。何人かの利用者が一緒にスヌーズレンルームに行くこともあります。暗い部屋で灯りがチカチカするところをじっと見ている利用者もいます。また天気が良い日は外に出ます。部屋の中では感じる事が出来ない風や光に触れ、身体力が抜けて、リラクセスされているような方もいます。

Aさんは職員と対面するよう抱っこすると、力が抜けて職員顔をみつめ、良い表情になります。Bさんは筋緊張が強く入ってしまうため横向きの姿勢を保つことが難しく、ほとんど仰向けで過ごしています。幼児期で体も小さく、体を揺らすとよく笑うことから、揺れを提供するためにシーツブランコを活動に取

り入れています。このように利用者が何を心地よいと感じているのかを考え、観察しながら活動を提供しています。利用者の中には、表出が見えにくく心地よいかどうかもわかりにくい方もおり、何を提供したらいいのか悩んでいるのが現状です。しかし、私たちは活動を繰り返し行うことで、どんな小さな変化も見逃すことなく、観察する力を養い職員間で共有することが必要だと思っています。一人一人の利用者と向き合いながら、より良い活動を考えていきたいと思っています。

(こだま 係長)

※スヌーズレンとは、1970年代半ばにオランダの知的障害を持つ人々の施設で、外界からの刺激を受けることで成長や発達が促されるという理論のもとに始まった活動です。

当施設のスヌーズレンルームには、ミラーボールや光ファーターを使った装置、光と影が動くよつなおもちゃ、ラジカセなどを用意しております。遮光カーテンにより暗くした部屋の中で、光の変化や音などを感じてもらおう活動をしています。